

こころ、からだ、いのち

中野 重行

国際医療福祉大学大学院 創薬育薬医療分野 教授 / 大分大学医学部 創薬育薬医学 教授

●機上で浮かんだ“キャッチコピーとなる言葉”

よいアイデアが生まれやすい場所として、古い中国から伝えられた「欧陽脩の三上(さんじょう)」というのがあります。三上とは、馬上、枕上(ちんじょう)、厠上(しじょう)をいいます。現代では馬に乗ることはほとんどありませんので、馬上は、車や飛行機での移動中にあたるといえるでしょう。枕上は、文字どおり枕の上、つまり夜寝る前や朝起きたときのことであり、厠上は、トイレの中を意味しています。このような場所で、フッとアイデアが生まれるというわけですが。頭に浮かぶアイデアはしばしば、アッという間に通り過ぎてしまいますので、メモ用紙の常時携帯が必要になってきます。

2001年12月16日の日曜日の朝、現代の馬上にあたる東京から大分に向かう「機上」で、今回のテーマに選んだ「聴くは効くに通ず！」という言葉が頭に浮かびました。東京で開催されていた学会に出席した帰路なのですが、この日は午後から、医療コミュニケーション教育に必要な模擬患者(Simulated Patient: SP)を大分の地で養成するための初めてのワークショップを開催することになっていました。参加予定者は、一般市民のボランティアの方々、種々の医療者、熱心な医学生有志です。前日まで学会活動で忙しくしていた行事がすべて無事終了して弛緩した気分の中で、筆者が当日の進行役をすることになっていたため、さて、

なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。大分医科大学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。日本臨床薬理学会元理事長、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会認定医・指導医、日本内科学会認定医、日本学術会議連携委員、日本心身医学会評議員、CRC連絡協議会代表世話人。「医療コミュニケーションの集い」のための「響き合いネットワーク」(大分、岡山、東京、長崎)の企画・運営に携わっている。



どのような段取りで司会を務めようかと想いを巡らしていた際のことで。専門としているストレス病の診療の現場では、話をよく聴くと治りがよい、使っている薬もよく効く、という長年の経験から出た印象があったので、その想いが結晶するよう形で「聴くは効くに通ず！」という言葉になったのだらうと思います。言葉の響きも、耳当たりがよさそうなので、今日はこの言葉の雰囲気で行進しよう、と決めたのでした。

●ある女子学生から届いたメール

その翌年から、大分医科大学(現在の大分大学医学部)で筆者が担当している医療面接の講義のタイトルを「聴くは効くに通ず！」にして、臨床実習が始まる直前の4年生を対象に講義を行うことにしました。医療面接に関するポイントレッスンとともに、実際に筆者が学生教育に携わる際に協力したいと申し出てきた患者さんがたまたま現れたこともあって、患者さんに参加していただく医療面接のデモンストレーション授業が始まったのです。現在はその発展形となる「患者の語る物語と医者の語る物語：聴くは効くに通ず！ 話すは放すに通ず！」というタイトルの授業になっています。

さて、その第1回目の「聴くは効くに通ず！」という講義を行って間もなく、ある女子学生からメールが届きました。「先生、今日はとてもよい講義を有難うございました。私は、講義室の片隅で、感動しながら先生の講義を聞いていました。でも、私は患者として医療にかかったことがあり、話をよく医師に聴いてもらうと心の開放感があって、気分が楽になることを何度も経験しており、「話すは放すに通ず！」という言葉が思い浮かべていました……」と書いてありました。深夜、大学の仕事を終えて帰宅しようと思い、当日の最後のメールチェックで読んだのです。さっそく、「素敵なメールをありがとう。『聴く』と『話す』、『効く』と『放す』はコインの表と裏の関係になっていま

連載⑦

「聴くは効くに通ず！」 「話すは放すに通ず！」

医療コミュニケーションの真髄に触れる
言葉をめぐるエピソード



す。つまり、「聴くは効くに通ず！」と「話すは放すに通ず！」は、同じコインの両面なのですね。これから、この言葉も一緒に使わせてもらおうかと思えます……」と、ごく簡単に返信して帰宅の途につきました。それ以来、この二つの言葉を一緒にしばしば使っております。つまり、学生との生きた交流から生れた合作なのです。

●“The most powerful drug is …”

これまで書いてきて、若い頃に似たような経験をしたことがあることを思い出しました。筆者は医学部を卒業して10年目の34歳のときに、新しくできた愛媛大学医学部に助教授として赴任しました。その年の夏から、米国スタンフォード大学に臨床薬理学を学ぶために2年間留学することになりましたが、帰国後、大分に移るまでの12年間、次の世代の医師になる若者に対して薬理学と合理的な薬物治療の考え方について語ることは、充実した時間を過ごすことでもありました。その頃の若き日の情熱が、懐かしく思い出されます。

毎年、薬理学の最後の講義の終わりに、医学生に語ることにしていたある習慣がありました。おもむろに黒板に向かって、「The most powerful drug is」とこまで書いて、教室を見渡して学生に問いかけます。「この1年間、薬理学の講義を受けてきて、君たちは何だと思う？」

たぶん、彼らの頭の中では、モルヒネや、抗がん剤や、抗菌薬や、もろもろの薬の名前が飛び交っているであろうことを想像しながら、またおもむろに、黒板に向かって書きを続けていきます。「… a doctor himself/herself」と。そして、「この1年間に学んだすべての薬に関する知識は忘れてしまっても、この言葉は一生忘れないでほしい。この言葉が、私から君たちに贈りたい心からのメッセージです」と語って、毎年、講義の締めくくりをしていました。

しかし、ある年、ふと子供の頃のような遊び心が頭をもたげてきて、次のような言葉を付け加えたのです。「いよいよ試験の時期になるが、君たちの答案用紙の答えが分からなくて困ったところにこの言葉が書いてあったら、私も人の子なので、採点のときつい手元が滑るかもしれない……」と。実際の試験の日にどのようなことが起こったかは、読者の皆様のご想像に任せますが、毎年行っていた無味乾燥な試験の採点で、その年ほど楽しかったことはありませんでした。答案用紙との対話が生まれたのです。最高傑作は、「いまはまだ、残念ですが、“The most powerful drug is the doctor yourself.”としか言えません。“The most powerful drug is the doctor myself.”と言えるようになるように頑張ります」との記載でした。

●こころの交流を象徴する“鮮やかな場面”

さて、話を戻しますが、前述の女子学生の学年の卒業生主催の謝恩会で、筆者が冒頭の挨拶をすることになっていたため、いくつかのこの学年の思い出の一つとして、「聴くは効くに通ず！」と「話すは放すに通ず！」というカップリングした言葉が誕生したエピソードを語ったのですが、このときの反響はさまざまいものがありました。

「先生にそのメールを送ったのは誰ですか？」という質問が次々と投げかけられました。本人の承諾が得られたら話してもいいと答えた後で、本人に尋ねたところ、「感動して泣いてしまいました！ 覚えてくださったのですね」とのこと。名前の公表はもちろんしてもよいとのことでした。

どのように公表するのがよいのか、と思案していたところ、余興の出し物が始まり、なんと彼女はその冒頭で、自らが音楽演奏とボーカルをする前に名乗りを上げたのでした。人間のこころの交流から生まれた生きた言葉として、いまも鮮やかに思い出される一場面です。